



# プレゼンテーションの仕方

## ① プレゼンテーションの技術と心得

大学の授業では、調べたことについてグループや個人で発表する機会があります。こうした発表を「プレゼンテーション」、あるいは短く「プレゼン」とも言われます。プレゼンの形態はさまざまで、ゼミ形式の授業で、少人数の聞き手を相手にプレゼンをすることもあれば、教壇に立って大人数を前にしてプレゼンをすることもあって良いでしょう。形態によって求められるプレゼンには違いがありますが、基本的には必要な技術と心得は同じです。それは、「わかりやすく話すこと(技術)」と「伝える熱意を持つこと(心得)」です。

## ② わかりやすく話すこと

わかりやすいプレゼンに必要なのは、聞き手が何も考えていなくても分かるよう、話のレベルを下げることではありませんし、1から10まで全て丁寧に説明することでもありません。話のレベルが低すぎれば聞き手は退屈しますし、話したいことをすべて話してしまえば詰め込みすぎた長いプレゼンになってしまいます。

重要なのは、話し手が全てを提供することではなく、むしろ聞き手の思考を促進することです。聞き手がこちらの話を聞いて、「つまりここで話し手が言っているのはこういうことだな」と積極的に解釈したり思考したりしようとする姿勢になってもらうことが、プレゼンのわかりやすさにつながります。話し手が一方

的に話すだけでなく、聞き手が理解しようと歩み寄る相互作用が生じなくては、わかりやすいプレゼンは成立しません。

では、聞き手の思考を促進するにはどうすればよいのでしょうか。それにはまず、「話の見取り図」を示すことが重要です。プレゼンの始めに全体の目的や狙いを示し、今話している話題が全体の目的にどう関わっているのか、個々の話題の分量はどれくらいか、を伝えることが、今話している内容にどんな意味があるのか、次にどんな方向に話が進むのか、聞き手の予測や想像を促進します。

こうしたプレゼンを行うためには、話の全体の構造がどうなっているのか、個々の話題が全体の目的にどう関わるかを事前にしっかり構成しておく必要があります。そのうえで、どの話題をどの順番で話すか、ということも重要です。

## ③ CCF と NLC

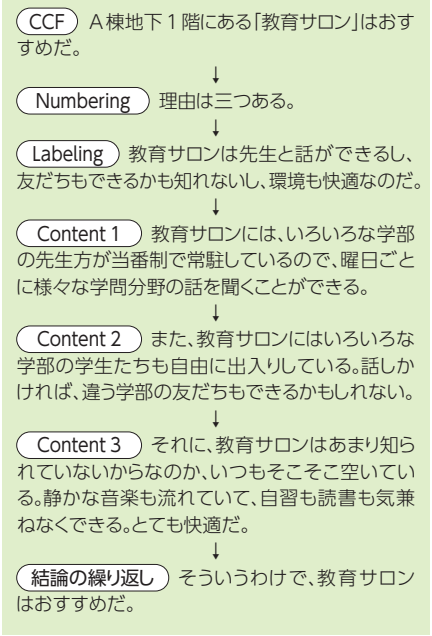
聞き手の予測を促すわかりやすいプレゼンの形式のひとつとして、“CCF”と“NLC”を紹介します。“CCF”は、“Conclusion Comes First(最初に結論を述べる)”の頭文字を、“NLC”とは、“Numbering, Labeling, Contents”の頭文字をそれぞれとって作られた、話し方の形式を指します。

CCFは、文字通り「最初に結論を述べる」ことです。実際には、物事の結論とはあれこれ考えたうえで最後に下すものですから、そんなに簡単に結論を言うことなどできない、と



感じるかもしれません。しかし、結論を出そうと意識することはプレゼンには必須です。そして、結論を出したうえで、その結論を聞き手に理解・納得してもらうには、どんな要素を説明しなければならないか、結論から逆算してストーリーを考える必要があります。逆に言えば、結論を理解してもらうに必ずしも必要ではない要素は、プレゼンに盛り込む必要はありません。結論は何か、そして、結論を理解してもらうためには最低限何を説明しなければならないか、を十分に意識し、詰め込みすぎを避けましょう。

NLCは、「言いたいことの数」→「言いたいことの見出し」→「言いたいことの内容」の順で進める話の手順のことです。CCFとあわせて具体例の一つ挙げてみましょう。



以上のような形式のプレゼンでは、何のために、今、何を話しているのか、を聞き手が容

易に理解でき、次にどう進むのか、予測し、考えながら聞くことができます。

## ④ 伝える熱意を持つこと

プレゼンの技術に加え、もうひとつ重要なのは、伝える熱意を持つことです。熱意は聞き手の心を動かす大事な要素なのです。プレゼンを熱意のこもったものにするには、「これからプレゼンする内容は、伝えるべき価値があるものだ」と自信を持てるようになるまで内容をよく検討し、事前に練習をするしかありません。

プレゼンの際、多少の緊張はあって当然ですが、緊張で原稿やスライドばかり見てしまうようなことはないようにしましょう。聞き手の関心がプレゼンから離れ、理解も損なわれてしまいます。

過度の緊張に巻き込まれないためには、プレゼンを聞いた相手にどうなってほしいのか（納得してほしい、感心してほしい、etc...）、自分なりの成功のイメージを持つとよいでしょう。覚えたセリフや原稿を正確に繰り返そうとすると、ぎくしゃくとした緊張を生みます。しかし、成功のイメージをゴールに据え、「聞き手にそうなってほしいからプレゼンをするのだ」という信念を持つことができれば、プレゼンの質はぐっと向上するはずですよ。

プレゼンテーションの技術や心得についてもっと学びたい人は、ロバート・R・H・アンホルト『理系のための口頭発表術』（講談社ブルーバックス）がお勧めです。タイトルは「理系のための」となっていますが、文系の学生でも十二分に活用できる内容になっています。また、レポートの書き方については、戸田山和久『新版 論文の教室』（P. 50参照）でさらに深く学ぶことができます。